もし、「あなたにとって親密な関係にある人、心を開いている相手、愛情を抱く対象は?」と聞かれたら、一体誰を思い浮かべるだろうか。友人、同僚、恩師、後輩、はたまたペットの顔が浮かんだ人もいるかもしれない。だが、多くの場合、心に思い描いたのは「家族」ではなかろうか。

家族とは、従来から愛や情緒的絆で結ばれた集団で、互いにケア（世話・配慮・気遣い等）を授受する関係であるととらえられてきた。しかし、DVや児童虐待等、家族間での暴力が問題視されている現状をいま一度思い返して欲しい。「家族なのだから」と夫の暴力を耐え忍んできた妻が少なくなかったように、むしろ家族を親密さやケアと不可分とみなしてきたことが、個人の自由を奪い抑圧的に機能してきたのではないか。実際には、家族だからといって必ずしもそれが愛やケアで媒介される関係であるとは限らない。「親密圏」とは、こうして既存の家族像が解体され、親密な関係を家族に限定せず再定義していくなかで二〇〇〇年代以降急速に普及した概念であり、情緒的絆やケアによって結ばれた人びとの領域を意味する。

親密圏ということばの使われ方はさまざまであるが、グローバル化する社会をよりよく理解する際に用いられる場合がある。例えば、香港やサウジアラビアをはじめ、世界各地に出稼ぎしている家事労働者や介護労働者を思い起こして欲しい。彼／彼女らは、自身の家族のケアは母国の親族に委ね、異国の地でケアを提供しながら血縁関係のない子どもや高齢者とのあいだに親密な関係を築いている。いまや情緒的絆やケアによって結ばれた

そうだったのか！

人間学のキーワード

親密圏
Intimate Sphere

加賀谷 真梨　民博 機関研究員

領域は国を超えて拡大しているのだ。また、そうした移民の増加は、国家や市民社会に代表される「公共圏」にも同時に変化を促している。彼らが団結し現地のNGOを巻き込みながら労働条件の改善や労働者としての権利拡大を謳うなかで、国境を超えたグローバルな市民運動が勃興しているのがその好例だ。親密圏の拡大はそれと二項対立的にとらえられてきた公共圏をも揺るがし、よりグローバルなあらたな公共圏を創出しているのである。

また、親密圏は人間生活に必要不可欠な関係性とみなされ、家族以外の場にその創出が謳われることもある。高齢者福祉を担うボランティアや自助グループ等、家族の枠を超えてケアを授受する集団を「新たな親密圏」とみなす研究がそれだ。しかし、筆者はこうした論調には疑問を抱いている。例えば日本の脳死臓器移植において、当人の意思よりも家族の意思が優先されてきたように、日本の場合、個人の生の処遇権はその家族に委ねられてきた。それゆえ、いくら新たに親密な関係を形成したところで、家族が有してきた生の処遇権が易々とそこに移譲されるとは思えないのだ。実際に筆者の調査地では、地域住民がいくら高齢者をケアし在宅で最期を迎えられるよう尽力しても、最期をどこで迎えるかの決定権は高齢者の家族に委ねられたままである。新たな親密圏が家族に取って代わる可能性を模索するよりも親密圏と家族との相違に着目し、そこから家族とは何かと問うていくことの方が重要だと思われる。いずれにせよ、親密圏は家族を解体するなかで生み出され、また逆説的に家族の再定義を促すという点においても意味のある概念であることは間違いない。